DATA

データで見る
産業人材医の実態

産業人材看護専門医訓練受験者を対象とした行ったリクルートアンケート結果（2024年）

【背景】
産業人材専攻医は近年増加傾向にあるが、この傾向は継続できるか。2024年に医師の働き方改革が始まり、更なる人材確保が必要である。加えて、医学生や医師研修医が勤務地や専攻を決める診療科に求める要素は年々変化している。そのため、産業人材専攻に影響する因子を明らかにすることは重要である。

【目的】
産業人材へのリクルート・関心をさらに上げるに、産業人材専攻に求められる因子を明らかにすることを目的とした。

【調査期間】
2024年7月29日～2024年9月30日

【対象者】
2024年度日本産業人材学会産業人材専門医訓練受験者

【方法】
日産研オンライン書籍システムを使用したオンラインアンケート形式
回収率上昇を目的に、リマインドメールおよびリクルートイベントの指導者（チューター）経由でアンケート回答を依頼した。

【回収率】
83.2% （367人/441人）

A 背景

項目名		人数(%)
性別	男性	137(37.3%)
	女性	227(61.9%)
	無回答	3(0.8%)
結婚の有無	既婚	229(62.4%)
	未婚	132(36.0%)
	無回答	6(1.6%)
子の有無（複数回答）	あり	128(34.9%)
	なし	222(60.5%)
	妊娠中	19(5.2%)
	無回答	4(1.1%)
家族・親戚中の産業人材（複数回答）	同居	58(15.8%)
	祖父母	21(5.72%)
	兄弟姉妹	15(4.09%)
	その他	17(4.63%)
	いない	292(79.6%)

性別は男性が137人（37.3%）、女性が227人（61.9%）であり、男女比では女性が高く、市年度（62.2%）、一方年（62.6%）とは同既でかった。専門医訓練受験者で各向さで所に多とは34.3%であった。一方、既婚者は62.3%と比較し増加した。本人あるいはパートナーが妊娠中の者は5.2%であり、市年（9.1%）と比較し減った。家族・親戚の産業人材の居住状況は市年と大きな変化はなかった。

臨床研修施設の種類は、大学病院が64人（17.4%）、市中病院が217人（59.1%）、市中病院と大学病院双方（市年と大学病院とたずさげけ）が88人（23.4%）であった。市年度と比較して、大学病院が減少し、たずさげけが増加した。

B 産業人材専攻が候補に挙がった理由・時期

産業人材専攻が候補に挙がった最初のきっかけ

産婦人科専攻が候補に挙がった理由は、市年同様に、周産期の臨床研修11人（31.9%）が最多で、周産期の産学4人（17.4%）、家族や親戚の影響55人（15.0%）と続いた。なお、本アンケートの対象者はWOW！関保年に比べ助対象学年ではなかった。

将来自分が進む診療科の候補に産婦人科が挙がった時期

産婦人科専攻が候補に挙がった時期は、許年同様に医学部5～6年生が149人（41.3%）と最多で、医学部入学前が80人（22.2%）、臨床研修2年目が55人（15.2%）と続いた。許年と比較して、医学部5～6年生の割合は減少し、臨床研修医1、2年目の割合が増加した。

C 産婦人科専攻に寄与した因子、寄与を決定した時期

産婦人科専攻に寄与した因子（複数回答可）

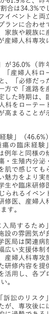
自由の記載・注意
産婦人科の先輩が増えがきたから
産婦人科の先輩がいたから
他経験

●回答者が対象者であった関保年オンライン開催

産婦人科専攻に最も寄与した因子

産婦人科専攻に寄与した理由は、周産期の臨床研修が最多で、婦人科腫瘍の臨床研修、先輩の影響が続いた。最も寄与した理由は、周産期の臨床研修が171人（46.6%）、家族・親戚の影響が41人（11.2%）、婦人科腫瘍の臨床研修が35人（9.5%）、先輩の影響が29人（7.9%）と上位を占めた。許年同様に周産期の臨床研修が最多であったが、許年と比べ、家族・親戚の影響、テレビドラマや漫画の影響が増加した。

産婦人科専攻を決定した時期



産婦人科専攻を決定した時期は、臨床研修2年目が223人（60.8%）と最多で、医学部5～6年生が63人（17.2%）、臨床研修1年目が44人（12.0%）と続いた。許年と比較して、臨床研修1、2年目に決定する割合が増加し、臨床研修前に決定した割合は減少した。臨床研修中には、2年目に入って産婦人科専攻を決定する者が多い。

D 産婦人科を寄与する要因となった産婦人科の魅力・不安

産婦人科専攻を寄与する要因となった産婦人科の魅力（複数回答可）

産婦人科専攻を寄与する要因となった最大の魅力

産婦人科の魅力としては、例年と同様にやりがい・充実感が最多で、幅広い診療領域、女性の一生に関わることができる点がやりがいだ。

産婦人科専攻前後での不安要素の変化

産婦人科専攻前の不安としては、例年と同様に当直がきつい、訴訟のリスク、体力的な過酷さ、人手不足、精神的な過酷さが多かった。実際に産婦人科医になった後は、ほとんどの不安は低減していたが、人手不足については半数以上が「問題がある」と回答した。

E 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の研修への影響

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によって産婦人科専門研修の修了要件の達成に支障が出たのは47人（1.8%）で、市年度（7.5%）に比べ大幅に減少した。理由として半年の制限や延期が挙げられた。

F -産婦人科を志す臨床研修医・医学生へ-

2024年度の産婦人科専門医訓練者を対象としたアンケート結果をもとに、産婦人科専攻の決定に影響する因子や専攻前後での産婦人科のイメージの変化等について検討しました。本考察では、これから産婦人科専攻を考える臨床研修医や医学生の皆さまに向けて、アンケート結果を踏まえた提言をお伝えします。

まず、2024年度の専門医訓練者の男女比は、男性が37.3%、女性が61.9%と、市年（62.2%）と同様の割合でした。また、既婚者の割合は62.3%、子どもがいる方の割合は34.3%でした。子どもを持ちながら産婦人科専門研修を始める医師もおり、ライフイベントと両立しながらキャリアを築いていくことは十分に可能です。自身のライフプランに合わせて産婦人科専門医を目指せることを忘れないでおいてください。さらに、家族や親戚に産婦人科医がいる方の割合は10.5%であり、身近なロールモデルの存在が産婦人科専攻に影響を与えていることが伺えます。

産婦人科ローテーションの理由として、「産婦人科に興味があった」が36.0%（許年33.7%）、「進路を産婦人科に決めていた」が33.8%（許年39.6%）、「産婦人科ローテーターが必修だった」が27.7%（許年25.1%）であった。産婦人科を選ぶ理由として、「必修だった」と回答した割合や「産婦人科に興味があった」と回答した割合は増加し、一方で「進路を産婦人科に決めていた」割合は減少しました。また、産婦人科専攻を決定した時期は、臨床研修2年目が60.8%と最多でした。このことから、産婦人科に早期から関心を持つことで、産婦人科を専攻候補として考え、最終的に選択する割合が高まることが示唆されます。

また、産婦人科専攻の決定に寄与した要因として、「周産期の臨床経験」（46.6%）が最も多く、次いで「家族・親戚の影響」（11.2%）、「婦人科腫瘍の臨床経験」（9.5%）、「先輩の影響」（7.9%）が上位に挙がりました。これらは例年と同様の結果です。医学生・臨床研修医の皆さまには、周産期領域を始め、腫瘍・生殖内分泌・女性医学など、幅広い領域の研修機会に参加し、産婦人科の魅力を肌で感じてもらいたいと思います。さらに、産婦人科ローテーションの交流を通じて、産婦人科に興味を持ち「必要だ」と考えてもらえたら嬉しく思います。また、日本産科婦人科学会では、医学生や臨床研修医向けのサマースクール（Fun Project）など、産婦人科に身近に感じられるイベントを開催しています。これらのイベントを通じて、全国の医学生や臨床研修医、産婦人科医と交流し、産婦人科の診療を体験する機会をしていただければ思います。

次に、産婦人科専攻前後での選択要因としては、「大学医局に入局した」（22.3%）、「やりがいがある・充実感が得られる」（18.3%）、「施設の雰囲気が良い」（15.8%）、「信頼関係がいい」（12.8%）が挙げられました。大学医局は関連病院との連携による地域医療が、研究機関としての研究機会の提供など、幅広い支援体制を整えており、信頼関係ができるなどさまざまなニーズに対応できることが、産婦人科専攻施設の選択に影響したと考えられます。皆さまには、自身の目標に合った研修内容を提供する施設やプログラムを選ぶことが大切です。病院見学や説明会などを活用し、各プログラムの特色を十分に確認して、自身に最適な研修施設を見つけてください。

産婦人科専攻前の不安としては、例年と同様に「当直がきつい」「訴訟のリスク」「体力的な過酷さ」「人手不足」「精神的な過酷さ」が挙げられましたが、専攻後には これらの不安の多くが軽減していました。産婦人科は「体力的・精神的に過酷なの」というイメージを持たれがちですが、やりがいが非常に大きく、実際に働くことでこれらの不安は払拭されることが多いと考えます。

産婦人科専攻を考えている皆さんには、本アンケートの結果を参考にしながら、自身のキャリアプランに合った選択をしていただければと思います。日本産科婦人科学会は、皆さんの産婦人科専攻を全力で支援してまいります。ぜひ、産婦人科の未来を担う一員として、私たちとともに歩んでいきましょう。

以上

2025年 2月（令和6年度）

日本産科婦人科学会産婦人科未来委員会内若手委員会
リクルートアンケートワーキンググループ

未来委員会
林　昌子、末光徳

若手委員会
飯田祐基、秋田啓介、鈴木真帆、山岡恭
榎本悠希、青木康太、諸山暖花、宮原美之